



## 子どもを育てる目（1）

子どもを指導するのに、こちらが思う通りに子どもがやらないことがあります。数の計算で、短時間で正確に答えが出せる方法を考えさせただけで、手間のかかる方法でやる子どもがいます。そのほうが子どもにとって考えやすいようです。無理やり押し付けてもどうにもならないので、しばらく様子を見てみると、短時間でできる方法を選ぶようになります。子どもは、2つの方法を比べて選ぶ力をつけました。回り道をしてしまうことが結局、子どもの確かな力になります。教師や親御さんは回り道をさせる目が大切です。

授業をしていると、子どもが、「そうか、なるほど」と声にすることがあります。思いつかなかった発見です。台形の面積を求めるには、台形を平行四辺形の形に変えてしまえばできそうだと発見する授業をすれば、考えることがおもしろくなります。何かを発見するということは、独創性につながります。教科書の答えに固執せず、もっと良いやり方はないのか、これでいいのだろうかと考えさせます。そうしていくうちに、正しい答えを求めるのが学習ではなく、納得のいく学習を求めるようになります。「みんなは〇〇だと考えを言うけれど、ぼくは何か少し違う」というわずかな違和感が出てくることもあります。新しい発見につながる、子どもならではの感覚があり、大人は独創性を育てる目が大切です。

科学の発展の歴史を見ると、新発見は発見者が児童期や青年期に漠然とした疑問を持ったことから生まれてくるのがいくつもあります。世界を変える力は、知識ではなく、知らないところから生まれるのかもしれない。新しい技術を始めるのは若い人であり、若いことは数多くのことを経験せず、多くの知識を持っていないことが将来の独創性の小さな芽となるのでしょうか。

授業での新しい発見は、多くの場合、教師と子どもたちとの対話で生まれます。5、6年生の授業では自分の主張を教師や仲間と伝え合い、時にはぶつかり合い、これまで思いもしなかったことが見つかることがあります。低学年の授業でも異なる考えを出し合うことはよくあります。先日、2年生の算数で、Aくんが考えを発言し、多くの子どもが賛成だと言った後、別の子どもが、「ぼくは、この考えに反対します。なぜなら〇〇だからです。Aくんの考えの（図を示しながら）ここは〇〇だと考えてしまったのだと思います。実は、初めにぼくもAくんのように考えてしまいました。」と言いました。教師と子どものやり取りから、何らかの違和感を持った子どもが発言し、そこからこれまで思いつかなかった考えが子どもたちの中で紡ぎ出されるのです。ただ、そこに至るまでには子どもと教師の信頼が育っていなければなりません。日常生活でも授業でも最後まで話を聞くことや人の意見を聞いてから考えさせています。この信頼は、自分と他者の心をつなぐものであり、自然に身につくものではありません。家庭生活や学校生活で努力して作り上げていくものであり、大人は、子ども同士の信頼を育てる目を持つことが大切です。